

波風をはやくやすめて學び子の さちを守れや江の島の神

— 乃木希典詠 明治40年8月

明治40年(1907)8月、学習院の片瀬游泳場における夏季游泳に、乃木は学生の“精神修養”を目的として、天幕(テント)生活を導入した。游泳期間中、野外に設置された十数張の天幕で年長の学生を生活させ、自身も共に天幕で起臥し指導にあたったのである。これは、学生教育においては日本で初めてともいわれ、後述する英国のボーイスカウト精神との共鳴も、ここに由来すると考えられる。乃木に指導を受けた学生の一人であり、後にボーイスカウト運動を日本に普及させた三島通陽は、「日本の青少年の集団キャンプの元祖はこの乃木さん」であり、「片瀬で毎夏、少年と楽しいキャンプを共にして遊んでくれたことは、今けん伝されている生活指導教育の要素があちこちに見出される」と回想している。

游泳期間中に行われる遠泳は、習熟度別に、江の島周游〔一里〕、鎌倉遠泳〔二里〕、葉山遠泳〔三里〕とされていた。乃木はあまり泳ぎが得意ではなかったというが、学生が游泳している間は、常に浜からその様子を見守り、幼年の者には自ら指導をすることもあったという。

游泳場からは美しい富士が望め、明治40年には乃木の詠歌<仰ぎみれば 心もいと、すみわたる 朝日てりそふ 富士の神山>が書かれた絵葉書が記念として発行された。以降も游泳記念絵葉書は作成され、参加者に配布された。

また、明治41年の夏季游泳にあたって、乃木が学習院に寄贈した一艘の櫓舟は、学生により「桜染丸」と名付けられ、学生に囲まれる乃木の姿と共に写真(頁下)に見ることができる。



学習院游泳記念絵葉書 明治41(上)・43年(中・下) [当館蔵]

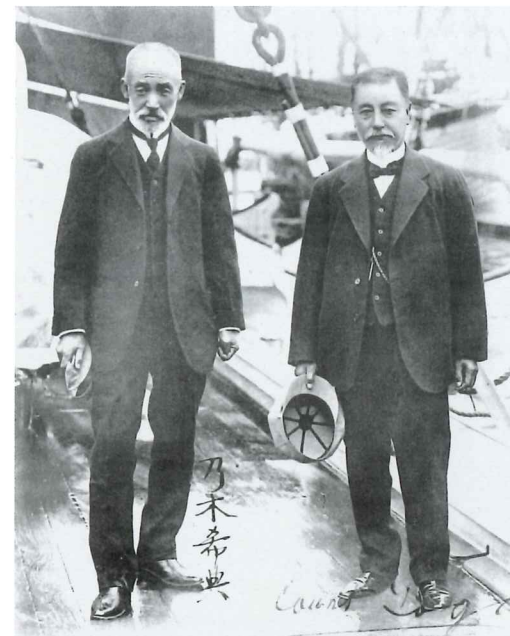


「游泳学生と共に写せる院長」 明治41年撮影 [当館蔵]



大そのの壁たつきはみたひらけく 青海原にさゝなみもなし

— 乃木希典詠 明治44年5月



「渡欧中東郷大将と共に写せる院長」 明治44年撮影 (『写真帖』より)

明治44年(1911)6月に行われた英国王ジョージ5世の戴冠式にあたり、同盟国であった日本からは、天皇の名代として東伏見宮依仁親王・同妃周子が参列した。その随行員の筆頭として、軍事参議官陸軍大将乃木希典と、同海軍大将東郷平八郎が同行することとなった。

渡欧前、乃木はドイツ・フランス・ロシア各国の駐日大使を訪問し、戴冠式後の視察の際に、各国の学校を参観できるよう依頼している。その際、乃木が「露国ノ貴族学校ハ世界ニ於ケル貴族学校ノ好模範タルヲ以テ是非参観シタキコト」と話したことからも、こうした海外での学校視察が、華族学校である学習院の院長として行われたものと推察できる。

戴冠式後、乃木は、英国の名門イトン校を訪れ、図書館や寄宿舎をはじめ校内の各施設を見て周った。また、別の日にはボーイスカウトの団を参観し、創立者のベーデン・パウエル中將らの歓迎を受けた。この際、天幕張り競争や救護演習などさまざまな競技に感動した乃木が、少年たちに演説する一幕も設けられた。

こうして、4月12日から8月28日の4ヵ月半にわたる海外渡航中、乃木は20校以上の貴族学校や士官学校を参観し、たびたび学習院に手紙を送った。

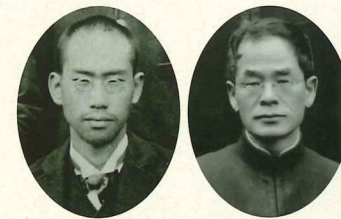
帰国後、乃木はボーイスカウトについて学習院の学生に講演し、この活動に明治41年の創立当初から興味を持っていたことを話している。現地で見学した競技の一つ“木銃教練”は、この後、明治45年4月から学習院に授業として取り入れられることとなった。



東伏見宮親王 東伏見宮親王妃 東郷提督と乃木大将  
戴冠式記念絵葉書 3枚揃 明治44年発行 [個人蔵]

(学芸員・吉廣さやか)

コラム 乃木院長と同じ時を過ごした人々  
— 西田幾多郎・鈴木大拙 —



明治42年頃の西田幾多郎(左)・大正8年  
学習院教官服を着用した鈴木大拙  
[石川県西田幾多郎記念哲学館蔵・当館蔵]

乃木が院長であった明治42年(1909)、独逸語と英語の教授が学習院へ赴任した。白樺派の長与善郎に「二人とも至って風采の揚がらない、小柄な弱々しい人に見えた。」「揃ひも揃つて恐しく度の強い眼鏡をかけてゐる。」と記された独逸語教授とは西田幾多郎であり、英語教授は鈴木大拙である。のちに日本を代表する哲学者となる二人は、共に明治3年(1870)石川生まれ。石川県専門学校(後の第四高等学校)同級生は、目白の地で再会したのであった。

西田の授業は「教へる」ということは余り年頭にならしい。」という様子であったが、就任後1年で京都帝国大学へ転任した際には、学生が「西田先生の本院を去るゝと惜む」という文章を書くほど影響を与えた。その西田は乃木の死の報に接し、学習院文学部教授・田部隆次に「乃木さん御夫婦の自害は実に非常な感動を与えました。特に小生の如き僅か一年程とはいへ日々將軍に接し居りしもの風貌今尚眼前に彷彿たる様に思はる。貴兄など尚更のこと、思ふ。あの様な真面目の人に対して我らは誠にすまぬ感じがする。(中略) 近来明治天皇の御崩御と將軍の自害ほど感動を与へたものはない」と書簡を送っている。一方の大拙は、大正10年(1921)まで奉職。寮長を務め、海外修学旅行の引率も行った。乃木院長が授業を視察しに部屋へ入ると、大抵の先生は急に襟を正して語調も変わったが、大拙だけは話しぶりも態度も少しも変らなかつたという、大拙らしいエピソードが残っている。

(学芸員・長佐古美奈子)